



(昔の嫁入り行列)

一 結婚と葬祭

1 婚姻から出産まで

(1) 媒酌人と結婚の成立

結婚が成立するまでにはいろいろな方法があっただろうが、普通は婚姻が成立すると相応の媒酌人ばいしやくじんを立てて式日を決定した。媒酌人は仲人なこうととか仲立ちとか仲立ち人と呼んでいる。媒酌人は夫婦そろって健在な者が選ばれた。媒酌人はいよいよ結婚式をあげるまでは東奔西走して労を重ねたものである。嫁になる気、親もやる気はあっても請われて一度で承知することは少なく数回通わせて忽体しつたぶる風があった。中には結婚式の日取りまでは犬馬の労を取りながら、いざ本番という時はさっと身を引いて形式的に知名士を媒酌人とするものもあつた。結婚式の日取りは黄道吉日を選んだ。日取りが決定すると婿方から嫁方へ酒肴を贈る。酒一升に鯛等をつけ、これを一升固めいっしょうかためといっている。一升を一生に通わせ、

新しい人生への固いちぎりとしたのである。

(2) 結納ゆいなん (かため)

日取りが決定するとその第一段階として、結納を身分に応じて婿方むこが持つて行く。結納は茶帯、扇子、白麻はくま、熨斗のし、酒肴しゅけん (鯛二匹、かまぼこ、酒は三升か五升、七升と奇数) 等で外に結納金を添える。結納は普通角かごに入れ、家紋を入れたおおいをかぶせ、親類や親しい知人三、四人が天秤棒てんびんぼうでかついで行った。嫁方ではこれを喜び大変な歓待をした。また、結納がくると嫁方では「娘ぶんみゃあ」とか「友だちぶんみゃあ」とか「別れぶんみゃあ」といって友人を招いて披露ひろうしてもてなしをする。

(3) 嫁入り

結婚式の日取りもきまり、結納が収められると結婚式を迎えることになるが、嫁が婿の所へ行く時、生活道具一式を持つて行く。たんす・長持・大小のたらい・鏡・衣類・小道具その他日用品等で、親類や知人、村の若者等に頼んですべてを肩にかつぎ、支えの竹棒を片手に持ちねじり鉢巻はちまきをきりりとして、式の前日か当日に長い行列を作つて威勢よく出発する。たんすや長持は家紋のついたおおいをかぶせ、媒酌人夫婦は紋付羽織はちまきを着て、家紋のついた提灯ちようたんを持ち行列の先頭に立ち嫁方への道案内をした。また、列の中には須賀台すかがだい (本来は島台という) といつて、松竹梅に鶴亀、おきなどおうなを配したものを持つて行った。これは全部が菓子で作られた手のこんだもので、披露宴の時親類縁者に少しずつ分配するが、食べるには忽体しつたないほどの美しいものであつた。この須賀台も昭和初期ごろから次第に姿を消

した。いよいよ嫁が実家を出る当日は、文金高島田にきれいな花嫁衣裳を着け、母親や友人等に付き添われて鎮守の神へ報告、お礼、お別れをかねて参拝する。たんす長持の行列が嫁方を出発する時は祝い酒を飲み、長持唄を歌いながら威勢よく出て行く。長持の行列が各村々を通ると村の人々は列を止め、この長持唄を歌うことを「所望々々」の声をかけて歌わせ、自分たちも歌ってにぎやかな歌合戦が始まり、なかなか部落を通り抜けることができなかった。(長持唄の歌詞は民謡の部参照)

(4) 中宿

嫁は婿方に行く途中、中宿といって婿方の近傍に然るべき家を決めしばらく休憩をする。中宿にはお茶や酒を用意してすすめる。嫁はいよいよ婿方に入るといっているので、ここで化粧や仕度の手直しをする。

(5) 火ふすべ

たんす長持がいよいよ婿方の近くに来ると、その通り道に近所の者が集まり、わら火をたいて歓迎するとともにわざと通りをじやます。たんすや長持の一部が焦げれば焦げるほど夫婦仲がむつまじくなるという縁起によつたものであろう。

(6) 提灯取替え・釜かぶせ

嫁が婿方の玄関にあるしきいをまたぐ直前、門辺で双方の提灯を取替える。そしてしきいの所で嫁の方へ釜のふたをかぶせる。また嫁の方は台所の勝手口から入れる所もある。これは台所を代表する釜の

ふたをかぶせることによつて、嫁がいよいよ家族の人となり台所を預けるという意味らしい。

(7) 祝言の盃

床には鶴亀・松竹梅の三幅対を掛け、島台、雄蝶雌蝶の銚子、土器、熨斗、昆布、三宝等を備え、花嫁花婿及び双方の姻族が着座し、あいさつのあと三々九度の盃をすまし、初手膳に始まり有明盆五段のそうめんて式が終わる。雄蝶雌蝶の酌はそれぞれ男女の子どもであるのが普通である。

(8) 披露宴

厳かな式が終わると直ちに披露宴に入る。一世一代の慶事だから料理人を呼び寄せて順次ご馳走を出し、大いに歌い、飲み、踊り夜遅くまで賑わう。式に参加した者は「本客さん」といい、お祝儀として米俵を贈った。米俵には大きな熨斗紙がはられ、米俵が多く列ぶほど豪勢であり親の自慢になった。何某さんの家より一俵少ないといふので、その親が自分の米俵を列べて豪勢さを張り合つたものである。

本客には座席に着くとお茶とお茶菓子が出され、次々にご馳走が運ばれるが、その間に今まで床に飾られていた須賀台のお菓子やむしり鯛という大きな鯛の塩煮を少しずつむしって配られ、また引出物としてかまぼこをつめた木箱や菓子箱をやった。嫁の方は友人の披露の外に近隣の者を「お茶講」と称して招き披露し、本客に座らない親類縁者には親戚振舞といつて披露する。婿の方は式や本客の披露宴等がすんでから友人、知人、親類の者を招待して披露するのが普通である。また翌日になると婿方の方は「お茶配い」といって姑が嫁を連れて村うちまたは古賀うちの家々を訪れ、紙に包んだお茶を差出してあい

さつに廻る。この日嫁は島田から丸鬚まるまげに結び直す。

(9) 婿入り

婿入りは嫁入りに先立ってする者もあり、式の数日後にする者もあって一様ではない。式順等は嫁入りの時とほぼ同じであるが、嫁入りのような豪勢さや賑わいは見られない。

(10) 初行（はつあるき）

嫁入り後三日目が五日目に初めて嫁は里方へ帰る。これを初あるきとか、みつめとか、歩みぞめとかいって近所や親類に饅頭まんじゅうを配る。里帰りには新夫婦だけで行く場合や婿方の親が新夫婦を連れて行くこともある。

(11) 着帯祝

妊娠してから五ヶ月くらいたつと妊婦に腹帯をさせる。多く戌いぬの日を選ぶ。そして近所や親類の者、産婆等を招待して妊婦の健全や胎児の成長を祝福して簡単な祝宴を開く。これを着帯祝といっている。

(12) 頼み茶講

里方から嫁入り先の近隣（普通古賀うち）に対し、出産の時世話になるというので、簡単な酒肴を出してよろしく頼むということである。このご馳走にあずかる前に主婦たちは村の鎮守へ行き「御願立」の行事をし安産を祈願する。お宮の境内にある木の葉などをとって、間違えないように一回々々その木の葉を一枚ずつ神にあげてお百度をふみ、御願立のお札をお宮へ供える。

(13) 出産

月満ちていよいよ出産となれば、近隣の婦女は総掛りで出産の手伝いをする。また、近隣の人や親類の者はお祝いとして魚や花色染の織物等を贈った。出産の後始末が一先ず終わると「手洗いぶんみゃあ」と称し簡単な食事を出す。切り取られた臍へその緒おは大事に包まれ、名前と出生年月日を書いて保存される。その子どもが難病にかかり危篤というような場合にはこの臍の緒へそを煎じて飲ませると一命が救われるという所もある。

(14) 名付け茶講

出産後男児は五日目、女児は七日目に名付けの披露のため、茶の葉、なます、煮豆等に出生児の名前札をつけて近隣縁者等に配る。

(15) 日晴れ茶講

男児は三十日、女児は三十三日目に日晴れ茶講といって茶の葉、なます、紅白の餅もちか饅頭等を近隣縁者へ配り内祝いをする。もともと日晴れは忌明けひめあけともいい、出産も物忌ものいみとしたのでそれが解ける意味である。

(16) その他

生後百日目には百日祝、一年目にはむかわり（向替）、三年目には帯解き（ひもときともいう）の祝をする。この時も煮豆とか餅、饅頭等を近隣縁者に配る。帯解きというのは付紐つけひもを解き帯をしめる意で乳

児から幼児になる儀礼である。また、生後始めて迎える正月、初節句の際は男児には引箭、女児には羽子板を贈って祝う。また、所によってはこの日、餅踏祝といって餅踏みわらじをはかせ、大きく作ったむかわり餅を踏ませて子どもの健在を祝福し将来の健康安全を祈る。踏ませた餅は小さくさいて近所へ配る所もある。餅を踏ませるのは足を強めて元気な子になすとか、幼児が成長してから他所へ出て行かぬようにねばりつけるためとか伝えられている。

2 その他の祝

(1) 初老祝

男子は数え年四十二才、女子は三十三才になった時「厄入り」といって親類知己の者を招き盛大に祝宴を張る。この年令はいわゆる厄年といい、その厄払いとともに人生の盛りを過ぎるに当たり、将来の健康を祈りまた激励するものである。仲間の者や親類の者はお祝儀として米俵を贈り、祝宴も三日間以上に及ぶこともあり、その当事者は大変なことだったという。女子の場合は男子ほど祝わず、全然しない人が多かったようである。昭和初期までは盛んであったが現在はほとんど見られない。

(2) 還暦祝

男女とも数え年六十一才になれば「賀の祝」といって親類知己等を招いて祝宴を張った。普通これを「ほんけがえ」といっている。これは「本卦返り」で、十干十二支は六十年で一巡するので、生まれ年のえと(干支)は六十一年目に再び廻ってくることになるのである。祝とか寿とか食紅で書いた餅を

近所にも配る。この日、男は子どもたちから贈られた真赤な布製の越中ふんどしを締め、女は真赤な襦袢とかちやんちゃんなどを着て祝う。また、七十才で古稀の祝、七十七才は喜寿の祝、八十八才は米寿の祝、九十九才は白寿の祝をするが、これらは全国的なもので現在も相当行われている。

3 葬祭

村で誰かが死去すると近所近辺の者を動員して親族知己に通知する。家族の者は仏を北向きに枕を替へ檀那寺の僧侶を呼んで枕経をあげる。通知を受けた者は直ちに弔詞に行き当夜はお通夜をする。葬儀は寺か自宅で営む。大正末期ごろまでは死体をかめ棺に納めることもあったが次第に木棺に変わり土葬が通例であった。また、木棺も立て棺(座棺)から次第に寝棺に変わり、それとともに土葬から火葬へと変った。入棺は親族の者がする。死者の全身を洗う「ゆがん」をし、白衣、手甲、脚絆を着け白足袋をはかせ、首から頭陀袋をかけて冥土への旅装束をさせる。額には三角形の布で鉢巻をし、一厘銭とか一銭銅貨を六枚とか四十九枚とか添えて棺に納めた。棺を釘付けするのは親とか子どもとか一番身近かな親族が行い金槌を用いず石ころで打ちつける。これを納棺という。納棺が終わると家を出て墓地へ向かう。葬儀の前には「打立膳」と称して精進料理を用意し酒や主食を会葬者へ振舞うのが普通である。棺が家を出る時は門口に四門六道を書いた竹ざおにろうそくをともし、その間をぬうように進む。棺は檀那寺境内の墓地か部落の墓地(山又は野墓という)へ運ばれる。これを「野辺送り」という。先頭には故人の俗名を書いたのぼり、続いて位はい、お供物、ひつぎ、僧侶、近親、親類、知人、部落の人と続く

が、親類等から贈られた赤、黄、青、緑、白等色とりどりのほぼ一反分の布を幟のぼりにして行列に加わり、僧侶の読経とともにしめやかに進む。ひつぎの上には天蓋てんがいといって鳳凰ほうおうを形かたどつた飾り物をかざして行く。また、故人に最も身近かな親族の婦人は綿帽子ぼんぼうしをかぶり、男子は略式の礼装として肩に白い布をかいた。野良のらに出たり、通路でこの葬列に出合った者は、付近から木の枝を折ったり、草花等を取って地面にさし、礼拝をして故人の冥福を祈った。葬列が墓地に着くと棺は三回まわされ、僧侶の読経のうちに墓穴に降される。ここで今一度焼香をする。墓穴は約二メートルの深さに掘られ、棺を納めると肉親の者が一蹴くわずつ土をかけその後は村の加勢人たちの手で土盛りがされる。土盛りの一カ所に一本竹を抜き立てる。これは死者が息を吹き返すことがあるかも知れない時とか、あの世へ行っても娑婆しゃばの空気を吸わせるためとか伝えられている。名尾あたりでは親族の者は墓地まで弁当を持って行き最後の食を共にして「墓別れ」をしたという。葬儀の日は「葬式がせえ」といって部落や古賀うち、三夜待仲間等が米を三合とか五合とか持寄って葬式万般の世話をする。加勢は通報、棺の注文、山掘り、料理まで一切行い婦人は主に料理を手伝う。山掘りの仕事をしている者には酒や精進料理が運ばれる。死者には「枕だご」といってうるち米で作つただんごを枕元に供える。名尾ではこのだんごを九合九勺くわうくわう（約一・七二リットル）の米で作る風習がある。棺をかつぐのは普通四人で青壮年が受持ち「がんかきさん」と呼ばれる。

葬儀の形式は宗旨により多少異なるが時の経過とともに簡素化してきたようである。葬儀の翌日は三

日供養くようといってお経をあげ寺へ参る。そして墓地に卒塔婆そとばを立て三日垣を作り、菩提寺ぼだいに故人が愛用していた寒暑の着物等を供えた。また、故人が生前着用していた着物の一枚を屋敷内に吊し、四十九日の仕上げ供養がすむまで毎日この着物に水をかけ故人が極楽浄土へ行ってくれるよう祈りをこめるといふ風習もあった。野辺のべ送りがすんで、故人の家に帰り着いた参列者は玄関口げんかんに柩きこを入れたらいたらいをまたいで家に入る所もある。これは今まで故人とともに幽界にいたことから再び俗界へ戻るといふ儀礼らしい。法事は初七日みななみか、二七日、三七日と七日目ななひごとに行い、その法事は親類の者が代りあつて費用一切を受持つ。そして四十九日をもって一応の法事を終わる。四十九日は「仕上げ供養」といって盛大に行い引出物まで贈る。この仕上げ供養が終わるとようやく仏壇を解く。家族の者は一年間は「忌ひをかふる」といつて神社参りやお祝ごと等へ出席することを慎みひたすら精進しょうじんを続けた。その後は一周忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、二十五年忌、三十三年忌、五十年忌、百年忌等の法事をするがこれも宗旨により一様ではない。また、三十三年忌以後は精進料理を使わずむしろ子孫繁栄を祝して先祖とともに祝い喜び合うことで祝事とする所もある。年忌のない年は「お祥月しょうつき」といつて僧侶だけを呼んでお経を上げ法要する所もある。墓制としては大和町では部落ごとの共同墓地が多く、墓地の入口には六地藏の石像や最北端には「墓守はかもり」の塔を建てている所もある。土葬の場合、一柱に一基の石塔を建てるのが普通であるが、火葬の普及につれて「寄せ墓」も多くなり、昭和四十年ごろから寺や墓地に納骨堂が次第に建てられるようになった。また葬儀は陰陽道おんみょうによる六曜りくのうち友引ともびきの日はさげられ、

止むなく友引の日にする時は棺の中にお供の人形を添えてすることもあった。この友引の日をさけることは今なお全国的に継続しているようである。

一 一年中行事

1 年始（一月一日）

年始は俗に「年とりの日」という。歳時記によると、一月を正月と呼ぶのは「正」は「改まる」また「改める」という意味を持つているので「改まる月」ということである。また陰暦異名で睦月というのはいっぴく顔をそろえて睦まじく親しむ月だからという。また、太郎月ともいうがこれは人の子の長男を太郎という習わしからきたもので一月は年の始めの月だからそう呼ばれたものである。

元日は早朝に起出でて朝風呂を浴び、若水で顔を洗い、つまり齋戒沐浴してから、その年の恵方を向き歳徳善神に不老長寿、福德円満、一家の安全をこめて祈念する。農家ではにわなかに歳徳さんの祭壇を設ける。祭壇は土台に臼をすえ、その上に箕を置き、それに一升枘を立て、餅、密柑、干柿等を重ね花や年とり蕪という大きな蕪か、またになった大根を供えお燈明をともす。お供えの花には松、梅、ゆずり葉（つんの葉）等の枝をさし、松の葉には餅とり粉で白く化粧する。これを雪松という。家族全員が歳徳善神の礼拝をすますと座敷に年長順に座り、新年のあいさつを交してから屠蘇酒を飲む。屠蘇は不老長寿

の薬といわれ、以前はかかりつけの医者へ年末の支払いを終わらせた時もらっていた。屠蘇は屠蘇延命散といつて中国渡来のものであるが、五十二代嵯峨天皇の弘仁年間（八一〇年ごろ）に典薬頭から献上したのが起源とされている。山椒、防風、肉桂皮、桔梗等を調合したもので、絹の袋に入れ、みりんを注いで浸み出したものである。屠蘇酒は大中小三段の盃（土器または漆器）で年長順に飲み始め、全部終わったら最初盃を始めた者に戻し、小さい盃から順に大きな盃を重ねて収める。これは末広がり縁起したものである。盃の合間にはするめ、昆布、数の子等を塩につけて肴にやる。数の子は鱧の卵で子孫繁栄を意味する。床の間には松に鶴などめでたい掛物をかけ、松竹梅の生花を置き、三宝に大きな鏡餅を二重ね置く。鏡餅の上には密柑、干柿、鯛等をのせ箸を添えておく。今一つの三宝には手前に広い昆布（これもよろこんぶ）、白髪昆布は自髪の生えるまで長生きするように（を垂れ、その上に白米一升を盛って鏡餅の隣りに置く。所によつてはこれを「おてかけさん」とか「てがき」「こがけ」等と呼ぶがこの言葉の起こりは不明である。我々の祖先は正月には神々がこの米に宿っていると考え、また大切な米への感謝と今年の豊作を祈ったことから来たものと考えられる。盛上げた米の上部にはだいたいところと木炭を置き、その周囲には密柑、干柿、栗等を列べておく。これは「代々この所に住む」という縁起によるものである。ところは山芋科の蔓草で「野老」とも書き、葉も山芋に似て大きく根も大きくなるが、正月用のものは「鬼どころ」というものでひげ根が多く食用にはならない。玄関には門松を立て、繩の中央にも前述の дайダイ、ところ、木炭やゆずり葉、裏白（もろもき）等をくくり付け